

2022年10月9日（聖霊降臨後第18主日、特定23、C年）

牧師メッセージ

「わたしは神様に救われた！」

（ルカによる福音書17:11-19）

司祭ヨセフ太田信三

主イエス一行が通りかかったとき、十人の重い皮膚病の人々が声を張り上げました。これまでも、癒やしを望み続け、叫び続けてきたことでしょう。しかし、その願いは聞かれることはなく、彼らは町の外で生活することを強いられていました。当時すでに評判が出回っていたであろう主イエス一行が通りかかることは、そのような境遇、痛みの中に生きる彼らにとって大きな期待であり、「この機を逃してはならない」という強い気持ちがあったように想像されます。ですから、彼らのこの時の声はもはや神への叫び、祈りだったのです。主イエスはこの祈りに応えて「祭司たちのところへ行って、体を見せなさい」と言われました。彼らはすぐに従い、祭司のところへ向かうその途中で患部が「清くされた」ことを知りました。

レビ記13章の規定によると、重い皮膚病にかかり、祭司から「あなたは汚れている」と言い渡された患者は、ユダヤ人の共同体から隔離され、町の外に一人で住まねばならず、歩くときも「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と叫ばなければなりません。症状がおさまリ、祭司に体を見せて「あなたは清い」と認められるまで、患者は共同体に復帰することが許されません。それゆえ主イエスは、十人の患者に「祭司たちのところへ行って、体を見せなさい」と指示したのです。おそらく、主イエスのもとに戻らなかった9人は、喜びのなか、家族の元へ急ぎ帰ったのでしょう。では、戻ってきた一人には何が起こったのでしょうか。

15節「自分がいやされたのを知って」という箇所では、ルカによる福音書は意図的にそれまでの「清くされた」という表現を、「いやされた」と言い換えています。ここで、「知って」とされているのは、「見る」という単語です。たしかに、他の九人も主イエスの言葉にすぐに従いました。しかし、この一人だけが「清くされた」こと以上のことを「見た」のです。彼が「見た」ものとは、清くされた患部の向こう側に働く神の憐れみの御手です。「神がわたしを救われた！」ということを見た彼は、感謝せずにはおられず、主イエスのもとに走り戻りました。いまや彼は、神がおられることをその目で知り、神と共にある命に迎え入れられたのです。

奇跡は救いの入り口でしかありません。その先にある主の御手による憐れみを見、神との交わりに迎えられるとき、救いは完成します。信仰とは、「その先」に働かれている神を見る目のことです。その目があれば、神の「わたしへの働きかけ」に気付くことができます。それゆえ主イエスは、「あなたの信仰があなたを救った。」と言われたのです。今日の福音で、救いから遠いとされていたサマリア人が救われたように、わたしたちも信仰という目をいただき、神の御手を見、神との交わりに迎えられ、賛美と感謝のうちに生かされたいと願います。